

チュウヒの里、サロベツを目指して ～チュウヒ報告会 2020～

2020年10月31日(土) 14:00-16:30

豊富町民センター大ホール 天塩郡豊富町西4条 8

共催：環境省北海道地方環境事務所・(公財)日本野鳥の会 後援：豊富町

協力：日本野鳥の会道北支部

司会：田中美恵子 (NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク事務局長)

14:00-14:05

・挨拶 柴原崇 (稚内自然保護官事務所国立公園保護管理企画官)

講演

14:05-14:45

・勇払原野における過去10年のチュウヒの繁殖状況と保全上の課題

先崎理之 (北海道大学地球環境科学院)

14:45-15:05

・チュウヒの繁殖阻害となっている野生生物について

米川洋 (エデュエンス・フィールド・プロダクション)

15:05-15:25

・チュウヒの推定つがい数と風力発電の影響

浦達也 (公財 日本野鳥の会 主任研究員)

15:25-16:55

・サロベツ周辺のチュウヒの繁殖状況と地域との共存

長谷部真 (NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク)

休憩

15:55-16:00

対談

16:00-16:30

・チュウヒの里サロベツを目指して コーディネーター 浦達也

対談者：米川洋 先崎理之 浦達也 長谷部真

閉会 16:30

講演要旨

勇払原野における過去 10 年のチュウヒの繁殖状況と保全上の課題

北海道大学大学院地球環境科学研究院

先崎理之

チュウヒ *Circus spilonotus* は、沿海州、サハリン、日本で繁殖し、東南アジアで越冬する猛禽類である。国内では主に北海道から本州中部で繁殖するが、数が少ないこと、ヨシ原等の生息環境が悪化し続けていることから、環境省レッドリストでは絶滅危惧 IB 類に選定され、2016 年には国内希少野生動植物種に指定された。北海道苫小牧市、厚真町、鶴川町にまたがって広がる勇払原野は、国内におけるチュウヒの主要な繁殖地の一つであり、2010 年代初めには約 25 つがいのチュウヒが繁殖していたことが報告されている (Senzaki & Yamaura 2016 Wet Ecol Manage)。本発表では、演者らが上記論文以降に行ってきた調査結果を併せて、勇払原野での過去 10 年におけるチュウヒの繁殖つがい数と繁殖成績の変遷を報告する。続いて、当地の湿地で繁殖するチュウヒのつがい数および繁殖成績に強い影響を与える景観要因を調べた研究 (Senzaki et al. 2017 J Wild Mange) を紹介する。最後に、これらの結果から明らかになった、当地のチュウヒの保全に必要な課題を整理する。

チュウヒの繁殖阻害となっている野生生物について

エデュエンス・フィールド・プロダクション ○米川 洋・和賀大地

チュウヒ *Circus spilonotus* の生態解明とその保全や管理を行う場合、生息環境のモデル化された評価や種の基礎生態だけをもって議論される場合が多い。しかし、現実の環境下では数多のレイヤー（階層）によって構成され、レイヤー同士は互いに影響しあって実在するため、簡単に生態系を解析することは出来ない。また、特定の地域だけの情報を元に評価しようとするクラスタ錯覚が生じてしまう。

例えば、生息数の増減を評価するような場合にも包括的な情報が必要である。しかし、繁殖ペア数や繁殖成功率、巣立ち雛数の生存率、人為的な環境改変の割合などだけでは不足である。個体の増減が何によって決定されてくるのか、潜在的な脅威など複合的で正確な情報が必要となってくる。

近年、AI 技術やディープラーニングが今後の生態学を牽引し、多次元レイヤーの解析も可能になりつつある。ただし、そこには精度の高いデータベースを確立していくことが重要である。

チュウヒの繁殖阻害となっている野生生物については、本種の繁殖分布や生存に大きく影響を与えているにも拘わらず、研究が遅れている分野である。また、レイヤーとしての認識が低いこともその要因かも知れない。

北海道におけるチュウヒの繁殖阻害に直接的に係わっている野生生物は主にオジロワシとアライグマの2種である。また、タンチョウやキツネのようにチュウヒの繁殖を間接的に阻害しているものもいる。

オジロワシは1990年には道内で27ペアのみが確認されていたに過ぎない。そして2005年には98ペアとなり、2020年には167ペアまで急激に繁殖数が増加している（白木2013a・環境庁編及びEFP調査2020）。

かつてオジロワシは十勝や釧路・根室または知床・網走のオホーツクの沿岸地域で少数が繁殖していたに過ぎなかったが、2000年以降は分布の中心域で増加したばかりではなく、天塩川や石狩川の流域でも繁殖するものが見られるようになり、繁殖分布を拡大した。

2010年以降はそのような傾向は顕著になり、大型河川の中流域から上流域にまで広がり、島嶼部での繁殖も確認されるようになった。また、食物資源としてオオセグロカモメやウミネコの繁殖コロニーを襲い、コロニー自体を壊滅させるといった問題も引き起こしている。そして、内陸部でもアオサギのコロニーやトビ、カラス類などが獲物となっているほか、河川敷などではユキウサギやネズミ類も捕食されている。本来、魚食性（一部水鳥を含む）であったオジロワシが個体数の増加に伴って食性中が広がり、新たな生態系の攪乱要因となっている。

そもそもチュウヒがオジロワシによって捕食され始めたのは2000年以降で、2001年と2003に釧路湿原や別寒別湿原で、それぞれ1例ずつ確認されていたにすぎなかった。ところが、2009年には石狩川河川敷や勇払原野・十勝川河口部で4例、2019年には石狩川河川敷、釧路湿原、濤沸湖湿原、サロベツ湿原で計7羽の捕食例が確認された。また、直接巣が襲われ雛が摂食された事例も出てきている。

これはもはや例外的なものとは云えず、日常的にオジロワシはチュウヒを食物の一部と認識しだしたと見なせる。したがって、オジロワシの増加はチュウヒにとって繁殖率または生存率に深く係わる脅威となったと云えよう。

アライグマについてもアオサギのコロニーや樹洞繁殖性の鳥類が襲われるようになっている。

今回の発表ではアライグマやタンチョウなど、その他の野生生物を含め解説したい。

チュウヒの推定繁殖つがい数と風力発電の影響

(公財) 日本野鳥の会 自然保護室

主任研究員 浦 達也

チュウヒは日本では湿原で繁殖する唯一の猛禽類であるが、日本国内で繁殖するタカ科の鳥類では繁殖個体数が最も少ない種とされ、環境省はチュウヒの国内繁殖つがい数は80~90であると推定している。チュウヒの繁殖個体数の主要な減少要因は、植生遷移によるヨシ原の衰退等による生息環境の減少に加え、湿地の開発（農地や太陽光発電等）やカメラマンおよび調査従事者等の繁殖地への過度な接近による営巣環境の攪乱などの人為的要因も大きいと考えられている。

2017年にチュウヒが種の保存法における国内希少野生動植物に指定されて以降、環境省や当会がチュウヒの生態調査や保護活動を進めていく中で、サロベツ原野とその周辺地域で多くのチュウヒが繁殖していることを確認した一方、特に本州以南では繁殖数の大幅な減少がみられる。当会は再度、チュウヒの繁殖つがい数を推定することによって、今後の保護のための基礎資料とする必要があると考え、2018年から2020年まで北海道全域において現地調査を伴ったチュウヒの繁殖分布調査を行い、また、本州の最近の繁殖状況を聞き取り調査することで、最新のチュウヒの繁殖つがい数を推定した。

その結果、チュウヒは北海道で111つがい（道北68、道東10、道央33）、本州以南で22つがい（青森4、秋田4、石川10、茨城1、愛知1、三重1、福岡1）、計133つがい程度が繁殖していることが分かった。しかし、本州以南では個体数の減少が著しく、2000年以降は最大で50つがい程度の繁殖が確認されたが、上記の理由などにより個体数が半減した。

チュウヒの個体数を減少させる要因として最近では、風車建設によるバードストライクや生息地放棄などの影響が欧州などでも懸念される。実際にチュウヒの一大繁殖地である勇払原野やサロベツ原野周辺で大規模風力発電施設の建設計画が進んでおり、自然保護側はチュウヒという希少種の繁殖地周辺に風車を建てること自体に反対する一方、事業者等はチュウヒの飛翔高度は低いため、バードストライク等が起こることはほとんどないと考えている。そのため当会は、サロベツ原野で繁殖するチュウヒを対象に2018年7・8月および2019年4・5・6月ののべ62時間の行動観察の結果から、チュウヒがどのような場合に風車のバードストライクが発生する可能性があるかを推測した。その結果、時期、時間、場所や環境に関わらずチュウヒの飛翔行動が多い営巣地周辺ではバードストライクの発生リスクが高く、特にオジロワシやトビなど他種の追い払い時、餌渡し時や雌雄ペアでの飛翔時に風車のローター高で飛翔する傾向がみられ、また、日の出から4時間経った頃に営巣地近くで旋回上昇する個体が多く確認された。それらのことから、営巣地周辺での風車の建設はバードストライクの発生リスクが高いことが分かった。最後に、生息地放棄を起ししやすいチュウヒの繁殖地では、開発行為をすべきではないと考えられる。

サロベツ周辺のチュウヒの繁殖状況と地域との共存

NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク

長谷部真

チュウヒはサロベツ周辺では4月から10月まで滞在する夏鳥で、主にササ原で繁殖し、河川や湖沼沿い・海岸草原・牧草地を利用します。国内で唯一湿地に繁殖するタカの仲間で、絶滅が危惧されているため種の保存法で保護されています。サロベツ周辺はチュウヒの繁殖地として国内最大です。

2020年は4月から8月まで計46日間調査を行い、餌運び等の繁殖行動がみられた営巣地を58箇所特定したほか、巣への出入りなどにより繁殖の可能性のある場所を6箇所確認し（日本野鳥の会・環境省事業）、2020年は調査を開始した2017年以降最も多くの繁殖地を確認しました。繁殖の可能性のある場所を含めると幌延町が26(20)箇所（括弧内は2019年の巣数を示す）と最も多く、豊富町が18(19)、天塩町が13(5)、稚内市で6(4)、遠別町1(1)箇所でした。幌延町や天塩町、稚内市では新たな巣を発見したこともあり大幅に増加しましたが、豊富町では2019年と比較して1巣減少しました。確認した巣のうちその後の繁殖の動向を追跡できた巣の繁殖成功率は72%で、2017年以降の調査で最も高くなりました。調査地の平均巣立ち雛数は1.9羽でした。幌延町では一つの巣から4-5羽の雛が巣出たという情報もあり、繁殖成功率が高いだけでなく、雛数も多い傾向にありました。これはネズミ等の餌資源が豊富だったことが示唆されます。巣立ち時期もいつもの年より早い巣が多く、餌となる小鳥の巣立ち時期も早い傾向にありました。確認した巣のうちの国立公園内の割合は28%で、2017年以降と同様の結果でした。

2020年も前年に引き続き、行政機関に対し、チュウヒの繁殖情報の提供を行いました。事前に連絡調整を行うことができた繁殖地では、工事の開始時期を変更する、監視員を配置しチュウヒに異常行動がみられないか確認するなど、チュウヒの繁殖に可能な限り配慮しながら開発事業が進められたため、チュウヒの繁殖への影響はほとんど確認できませんでした。また、農業開発（1箇所）や道路開発（1箇所）では提供した情報がよく伝わらなかったため、工事が開始されてから繁殖への配慮を促した事例もありましたが、速やかに配慮がなされた結果、最終的に繁殖が成功したのを確認できました。民間事業者にも事前に連絡を取り、工事時期をずらすなど繁殖への配慮がなされた結果、繁殖成功を確認した場所もありましたが、一方で途中で繁殖を中断した場所が1箇所、連絡を取っていなかった民間事業者に配慮を促した場所が1箇所ありました。過去に開発事業により一度繁殖を放棄した場所でも、その後の配慮の結果、2020年に繁殖を再開・成功した事例もありました。

以上のことから、行政機関や民間事業者との間でチュウヒの繁殖に関する情報共有が行われ、その結果、繁殖への配慮がなされれば、開発行為による影響が低減されることがわかったことから、今後も情報提供を続けることで、サロベツのチュウヒの繁殖地を保護していきたいと考えています。また、チュウヒが経年的に繁殖利用している場所について、可能な場合には土地の購入をし、保護区を設置するなどしてチュウヒの繁殖地を積極的に保護していくことも必要です。2020年は普及啓発を目的にチュウヒのステッカーを作成しました。今後もチュウヒに関連する商品の開発により、チュウヒの保護に関する地域理解の促進に取り組み、チュウヒと地場産業とが共存できる「チュウヒの里、サロベツ」の創出や展開を図っていきます。